オーストラリアの観光産業　no.3
エコツーリズムの現状と可能性について：ケーススタディ no.3

青山晴美

The Study of Tourism in Australia: Ecotourism
Case Study No.3

Harumi Aoyama

キーワード：オーストラリア Australia，観光産業 tourism，エコツーリズム ecotourism，
フレーザー島 Fraser Island，環境 environment

1．はじめに

本稿は、オーストラリアの観光産業を考察するシリーズno.3である。オーストラリアでは、世界的に経済が低迷する中、外貨獲得と雇用促進の主要な産業として、持続可能な観光産業（sustainable tourism）を推進している。前稿[1]では、オーストラリアでの観光産業ならびにアボリジニ観光についてのケーススタディを行い、その現状と課題について考察した。本稿では、エコ先進国と言われるオーストラリアのエコツーリズムの現状と可能性について、ケーススタディをもとに考察する。

エコツーリズムという言葉は、1980年代に誕生した。1990年代初頭、世界的に環境問題への関心が高まり、新しいスタイルの観光が模索され、自然愛好家たちを中心にエコツーリズムが注目されるようになった。国際エコツーリズム年の2002年には、地球環境問題を解決するひとつのキーワードとして、エコツーリズムに関するワークショップが世界中で開かれた。５月にケベックで開催された、世界エコツーリズムサミットは注目をあびた。

エコツーリズムとは、1990年のTIES (The International Ecotourism Society)の定義によれば、“Responsible travel to natural areas that conserves the environment and improves the well-being of local people”「環境を保全している地域に、責任を持って旅行し、地域の人々に経済的貢献をすること」である。エコツーリズムとは、観光を通じて、地域の自然環境に親しむと同時に、環境の保護活動をすることである。そして、訪れる地域に経済効果をもたらすことも目的となる。観光収益は、地域社会の福利や環境保全に還元され、環境に配慮した地域社会をつくることに当てられる。そのためには、エコツーリズムは、地域住民、行政、研究者、旅行者、旅行業者が、それぞれの立場を尊重しながら、協力しあい連携プレイで推し進めるものである。また、TIESによれば、エコツーリズム活動の実施者、または参加者は以下の原則に従うことが求められている。

・インパクトを最小限にする。
・環境や地域文化に対しての気づきと尊敬の念をもつ。
・訪問者と主催者側双方にポジティブな経験を与える。
・環境保全のために財政上の利益を与える。
・地域住民に財政的恩恵と権限を与える。
・迎え入れてくれる国の政治・環境・社会風潮への感性を高める。

しかし、近年、エコツーリズムの急激な発展とともに、「持続可能な」とか、「地域の発展」

などの要素ももちこまれ、「エコツーリズムとは何か？」という問いに対して、様々な議論が入り込んできた。本稿では、エコツーリズムを、以下の３つの要素を含むものとして取り扱う。(2)

１．エコツーリズムは、自然環境のもとで行われる活動である。利用者へのサービスが環境に与える悪影響を最大限におさえる。
２．エコツーリズムは、教育的・解説的要素を含む活動である。
３．エコツーリズムとは、持続可能な方法で管理・運営される。

本稿の舞台となるオーストラリアは、エコツーリズムのリーダーとして、世界的に注目されている。オーストラリアには、最古の人類文化のひとつとされるアボリジニの文化遺産に加え、豊富な固有の動植物や自然遺産も多くある。エコツーリズムは、オーストラリアが世界に誇る「自然資源に立脚したツーリズム」として、また、地方の若者を深刻な失業問題から救う重要な産業としても意義あるものとして受けとめられている。

エコツーリズムにおける著者の関心事は、「環境保全」と「観光産業」という、本来相反する関係にある両者が、「エコツーリズム」という枠組みの中で、どのように共存できるのかという点にある。エコツーリズムは、環境に大きく依存しており、環境なくしてはツーリズムそのものが存在しない。しかし、宿泊施設の建設、人や物資の輸送、廃棄物処理など、観光産業そのものが環境に悪影響を及ぼすのは明白である。一方で、環境を重視すれば、旅行者は快適さや便利さを犠牲にしなければならない。観光業者にとっては、集客率の低下に加え、コスト面での割高になり、観光産業としては成り立たなくなる。

環境への配慮と、旅行者の需要とがバランスよく共存しなければ、エコツーリズムは成立しない。観光地を回り写真を撮り、お土産を買う従来のマスツーリズムとは異なり、環境に対する理解を深め、感謝の念が生まれることで、環境保全へとつながらなくてはいけない。しかし、一方で、エコツーリズムは、限られた市場であり利益率が低く、環境への財政的支出がともなうとして、旅行会社から敬遠されがちでもある。また、エコツーリズムという名前のもとで、実際には環境破壊を行っているのではないかとの批判もある。こうした現状を踏まえ、本稿では、1992年に世界遺産に登録された、世界最大級の砂の島、フレーザー島でのケーススタディを通して、上記の問題点に焦点をしぼり、オーストラリアにおけるエコツーリズムの実態を考察しながら、その可能性を模索していく。

２．オーストラリアのエコツーリズム

オーストラリアでは、1980年代末から、環境保護運動が活発になると同時に、観光のあり方についても、持続可能な開発の必要性が唱えられてきた。1991年には、観光業界を中心にNPOオ―ストラリア・エコツーリズム協会（EAA）が設立された。また、1994年、オーストラリア国家エコツーリズム戦略（Australia National Ecotourism Strategy）が発表され、エコツーリズムを国家政策とする方針が固められた。EAAは、エコツーリズムを以下のように定義している。

“Ecotourism is ecologically sustainable tourism with a primary focus on experiencing natural areas that fosters environmental and cultural understanding, appreciation and conservation.”

「エコツーリズムとは、生態学的に持続可能なツーリズムである。自然地域での体験を通して、環境や文化についての正しい理解と感謝の念を深め、その保全に努めることが最も重要な点である。」

1995年、オーストラリア観光庁は、エコツーリズムビジネスを始めるための、省エネと廃棄物軽減のためのガイド“Best Practice Ecotourism”を発行した。1996年、これを受けて、政府の後押しのもと、各州でも個別の計画

が推進された。1997年には、本稿のケーススタディの舞台となるクイーンズランド州では、“Ecotourism Plan”を発行した。現在、エコツーリズムの質の低下を抑えるために、EAAが中心となり、商品の認証制度を施行している。エコツーリズム商品[3]対して、宿泊施設、観光施設、ツアーやアトラクションに対しての評価を表したものである。観光客（消費者）に識別しやすいように３種類のロゴをつけ、エコツーリズムのレベルが分かるようにしている。また、エコガイドの資格制度の導入、官民の協力体制の強化、他業種と連携してのエコツーリズムの開発にとりくんでいる。[4]

３．ケーススタディ

3-1　フレーザー島

今回のケーススタディは、クイーンズランド州南東岸沖にある世界最大級の砂の島、フレーザー島である。1992年には世界遺産に登録され、オーストラリアでは、11番目のユネスコの自然遺産地域となった。複雑な砂丘の形、湖の数、生物の多様性で注目されるフレーザー島は、面積1660平方キロメートル、南北123キロ、最大幅は22キロ、東海岸の３箇所の火山岩の岬以外は、すべて砂で出来ている。

フレーザー島は、先住民であるアボリジニのバッチュラ（Butchulla）からは、ガリ（Gari）「楽園」と呼ばれていた。40を越える湖、降雨林や巨大な砂丘、生態系の多様性など、類まれな自然の美しさに加えて地質学的にも大変興味深い島である。フレーザー島に最初にやってきた「白人」はキャプテン・クックだが、1836年、ジェイムズ・フレーザー（James Fraser）率いる船が難破して、生存者が島にたどりついた。その後、探検家のアンドリュー・ベイトリー（Andrew Beitly）によりフレイザー島と命名された。1863年からは木材産業が盛んになり、島のいたるところに、木材輸送用の路面電車が作られ、環境は破壊されていった。フレーザー島を有名にしたのは、1925年頃から盛んに行われたサティネーの産出である。水に強いということで、スエズ運河にも使用された木材である。木材産業が完全に廃止されるのは、島がユネスコの世界遺産として登録される前年の1991年であった。世界遺産の登録に先立ち、環境に対する取り組みの強化がその理由である。

フレーザー島に観光業が進出したのは、1934年、ハッピー・ヴァレー・リゾート（Happy Valley Resort）の設立からである。２年後には閉鎖されたが、その後、1950年、同名のリゾート施設が再度設立された。1963年には、オーキッド・ビーチ・リゾート（Orchid Beach Resort）と、ユーロン・リゾート（Eurong Resort）が設立され、観光地として発展する基礎が固められた。そして、1992年の７月には「環境に配慮したエコリゾート」として、キングフィッシャーベイ・リゾート＆ビレッジkingfisher Bay Resort & Villageが開業した。

3-2　環境に配慮したエコリゾート Kingfisher Bay Resort & Village

エコリゾートとは、一般的な観光宿泊施設とは異なり、「周囲の自然環境に配慮した」宿泊施設のことである。宿泊客に対して、環境教育も兼ねたプログラムを提供し、エコツアーも行う。また、宿泊施設やツアーにおいても、省エネ対策を行い、ゴミや汚物の処理方法など、環境に配慮していることが特徴である。1992年、環境に配慮したエコリゾートとしてオープンした当施設は、オーストラリアでも、自然環境を守る大型のエコリゾートの草分けとして、注目を集めている。オープン以来、いくつもの環境観光賞やエコツーリズム賞を受賞している。

エコツーリズムでは、まず、リゾート周辺の環境と文化の保全が最優先に考えられなければならない。リゾートがかかえる問題は、観光客に対して快適なサービスを提供する上での、環境汚染と、エネルギー確保、および、廃棄物処理である。当施設では、これらの問題解決のための様々な工夫が行われている。当エコリゾートの開発に当っては、多数の環境専門家が関わった。周辺の道路の形は、生育していた植物に

合わせてつくられた。また、建設予定地にあった、まだ十分に成長していない植物は一旦ポットに移され、建設後に改めて植樹した。周辺の生態調査なども専門家により詳細に行われた。[5]

エコリゾートのエントランスホールだが、窓ガラスから採光を取り入れて節電し、自然の風を利用した空調の工夫がなされている。なだらかな曲線を描くデザインは、島にある砂丘をイメージしている。（写真１）

写真１　エントランスホール

島のホテル棟は、周囲の環境に合う木造二階建てで、トタン屋根と青緑の柵がついている。室内には、エアコンの代わりに受動型冷却（passive cleaning）を使用し、年間50万キロワットの省エネをしている。また省エネ型蛍光灯の使用で、通常の15％の電力使用となる。次に、下水の問題だが、観光施設から出る排出物の中で最も環境にダメージを与えるのが、シャワー、キッチン、洗濯室、トイレからの汚水である。汚水は、まず活性汚泥と浄化した液体に分けられる。（写真２）　次に、ある程度乾燥させた活性汚泥に、粉砕した生ゴミと、シュレッダーにかけたOA用紙を混ぜ、ミミズを使って堆肥土にする。（写真３）　いずれもリゾートの敷地内に処理場があり、その隣では、堆肥土を使った菜園がつくられている。当リゾート内のレストランで使用する野菜はここで栽培される。（写真４）

写真２　汚水処理タンク

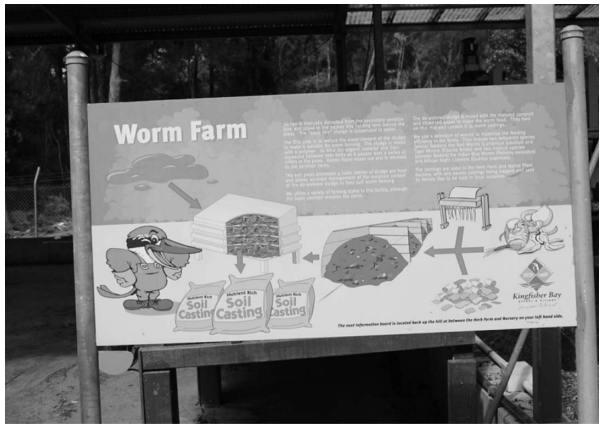

写真３「ミミズ農場」の看板

汚水から堆肥土が作られるまでの工程が写真と絵で説明されている。

写真４　リゾートの菜園

また、リゾート内で出た廃棄物は、それぞれ分別して処理されるが、紙類、ガラス、アルミニウム、ブリキ、プラスチックなどは、船で本土のリサイクル施設に運ばれる。（写真５）

写真５　リサイクル容器置き場

3.3　エコツアー

エコツアーは、エコツーリズムの運営のための具体的な手段のひとつであり、商品である。フレーザー島では、様々なエコツアーが用意されている。リゾート周辺の植物や、生息する325種類のバードウォッチング、夜行性動物や星を観察するガイド付きウォークなどである。その他には、４WDで島内の自然を観察するガイド付きエコツアーも用意されている。こうしたツアーに参加することで、自然を理解し、自然保護に貢献したいという気持ちを育てることができる。

今回、著者が参加したエコツアーは、cool dingoという、若年層（年齢35歳まで。特にバックパッカー）用に組まれた、リゾートではなくロッジに宿泊する２泊３日のものである。フレーザー島特有な、砂地に熱帯雨林という景観、620種もの植物、またいくつかの湖での探索を体験するというものである。今回のツアーの参加者は、ドイツ人５名、オランダ人２名、アメリカ人１名、イタリア人２名、スイス人１名、カナダ人１名、イスラエル人１名、そして日本人１名（著者）であった。参加者は、エコツーリズムに関心があるというよりも、旅行代理店にすすめられ、世界遺産の美しい島フレーザーでの休暇を楽しむという目的である。

エコツーリズムは、本来、「何かを学ぶこと」が最初から予定され、ツアーに組み込まれている。例えば、ガイドは、ある植物の特徴について単に説明するだけでなく、その植物が生態系にどのように適応しているのか、他の植物や動物とどのような関係にあるのかなどの解説をすることになっている。エコツアーに付き添うガイドが、インタープリター（解説者）と呼ばれる理由がそこにある。しかし、現実には、ガイド経験が10年以上というベテランから、今回、著者が出会ったような１年未満というガイドもいる。当ツアーで、エコツアーにふさわしい教育的説明がなかった理由をガイドに質問したところ、「人は教えられるのが好きではない」という観点から、ガイドとしては、「なるべく観光客の思い通りの行動をさせ、質問されたら答える方法をとっている」という答えが返ってきた。ほとんどの客は「楽しむこと」を目的に旅をするからである。しかし、エコツーリズムを体験するという目的をもった著者には期待はずれであった。当ツアーでも大多数をしめていたのは、西ヨーロッパからの観光客であるが、彼らは太陽を求め、「ビーチ」で日焼けすることを楽しみに参加していた。こうした顧客の要望に答えるためか、ツアーの多くの時間は、いくつかの湖のビーチを訪れることに当てられていた。環境保全に関するガイドからのレクチャーを期待していた著者にとっては、いささか的外れなものであったが、オーストラリアの観光産業にとって、大多数をしめるドイツ・オランダ・イギリスを中心とするヨーロッパからの顧客の要望に答えなければ、ビジネスとしては成り立たないこともまた現実である。

ガイドによる解説の隙間をうめるのが、島の観光スポットに用意されている「静的な解説」である。情報版や解説用展示物があり、観光客自身が足を止め読むことが出来る。（写真６）加えて、エコツアーとしての目的にそって、様々な工夫もなされている。ツアー中の食事は、すでに調理されたものが、毎朝、ロッジのキッチンからプラスチック容器に詰められて車に持ち込まれ、ツアー客の使用した食器は本土でのリサイクルに回される。また、訪問地の環境への負荷を最小限にするために、訪問者の道筋をつけるために、ボードウォークも設置されている。周囲の熱帯雨林や小川の景観と調和するよ

うな色使いで「道」をつけることで、観光客に踏み荒らされるゾーンを最小にしようとする試みがある。

写真 6　生態系についての情報板

エコツーリズムの特徴は、環境の生態系について、また、ツーリズムの影響を最小限に食い止める方法や、環境がいかに壊れやすいものかを学ぶという、「教育的要素」を含むことにある。その点からしたら、今回参加したエコツアーが、エコツーリズムであるとは断定できない。エコツアーであるためには、ガイドの質と知識と、参加者の態度と心構えに拠るところが大きいといえる。しかし、一方では、ただ自然を鑑賞したり、休息するなどの体験の方が、「学習する」ことよりも大切だとする意見もある。精神的なくつろぎは、自然について「学ぶ」ことよりも評価されるべきであり、情報の与えすぎは観光客の精神的な負担になりうるというものである。本来のエコツーリストは、最初から自然に対して積極的な関心を抱いており、知識も豊富だからというのがその根拠である。しかし、現実には、エコツーリストの市場の拡大により、知識の少ないエコツーリストも増加傾向にある。大切なのは、エコツーリズムは、ガイドと参加者との共同作業だと再認識することである。

3-4　エコツーリスト

ツーリストは、エコツーリズムを支える重要な構成員のひとつである。本来ならば、自然環境に立脚した観光形態は、利益を追求するツーリズムと必ずしも一致しない。そして、エコツーリズムに参加するツーリストも、こうした考え方を理解しているはずである。エコツーリストの定義としては、セバラス・ラスキュレインが、「現存する文化遺産、風景、野生の動植物を研究したり、楽しんだりする目的で、比較的悪影響や汚染を受けていない自然豊かな地域を旅する人」だと述べている。[6]しかし、エコツーリズムに参加するツーリストの全員が環境保全に関心があり、生活の中で、それを実践しているわけではない。今回インタビューに答えてくれた、当エコリゾートのツアー部門のGMであるHay氏の以下の言葉が、それを如実に語る。

「エコツーリストという言葉には幅がある。厳密に言えば、実際にはエコツーリストはほとんどいない」「人々は日常生活から離れ、何かを求めて観光に来る。観光は『薬』である。その意味からすれば、エコツーリズムは『うそ』である」

実際に、リゾートの各部屋には灰皿がありテレビもあり、他の一般的なホテルと変わりはなく、一見、エコリゾートとしては不釣合いな気がする。この理由についての質問の答えとしては、必要最小限の集客数を維持し、ビジネスとして成り立たせるためには、顧客の限定化は好ましくないとのことであった。特に、比較的経済的ゆとりのある、エコリゾートの宿泊客数は、1990’s終わりにピークを迎え、それ以後は減少している。世界的経済不況の中、物価の安い東南アジアで長期休暇を過ごすオーストラリア人が増加している。高額なエコリゾートで、環境保全についての教養を深めながら、休暇をとることはあえてしない。現在では、旅行者の平均滞在日は 3 日にとどまっている。追い討ちをかけているのが、最近の不況の影響で、企業が経費削減のために会議の開催場所として、エコリゾートを使用しなくなったこともあげられる。しかし、そうしたエコリゾートの運営の難しさとは別に、若者のバックパッカーを対象にした、ロッジに宿泊するツアーは、景気に左右されることもなく、売り上げは順調だという。GMの

Hay氏の話からは、エコリゾートの運営は、経済の動向に左右されやすく、自然環境と同様に、現実的にはビジネスの維持そのものも難しい局面にあることが伺えた。

エコツーリズムを目指しながらも、現状としては、「自然資源」を楽しむ、ネイチャー ツーリズム（nature tourism）や、ネイチャーベイスト ツーリズム（nature based tourism）、ワイルドライフツーリズム（wildlife tourism）との差異化が難しくなっているのかもしれない。本来、エコツーリズムには、教育的要素が含まれ、単に自然資源を楽しむ観光形態とは異なるはずである。しかし、軸となる教育的要素が、発信する側と発信される側との間でうまくキャッチボールできなければ、エコツーリズムの存在意義はなくなってしまうであろう。

Hay氏は、自然環境がいかに人によってもろくくずされるのかを指摘する一方で、観光客の多くは、「教育されたくない」と言う。観光ビジネスを成功に導くためには、観光客をできるだけ自由にさせておくことが大切である。観光客は、「自然の中を歩きながら」「勝手気ままに自分たちの話をして」、「写真をとる」ことに楽しみを覚える。わざわざ、教会や学校のように講義を受けるために観光に来るのではない。この意味からすれば、エコツーリズムは、通常の自然を基盤にしたツーリズムとなんら変わることはない。Hay氏のガイドとしての経験から、ほとんどの観光客からは、エコに関する質問はないという。他の２名のガイドにも同様な質問をしたが、似たような答えが返ってきた。エコツーリストという言葉には幅があり、フレーザー島に来る多くの観光客はエコツーリストではないし、自然に関しての特別な関心を抱いているわけでもない。日常生活を離れての、「一時を楽しむ」という感覚が、島にくる理由として一番合っているのではないか。Hay氏のコメントにもあるように、今回のツアーでも、参加者が、エコツーリズムに関する質問をガイドにする光景を、著者は見たことがなかった。砂地に熱帯雨林が生い茂る稀有な自然の中を歩いたときも、参加者は、情報版を読むよりも「自分の物語」をお互いに語り合うことに夢中になっていた。Hay氏とのインタビューを通して、教育的要素をツーリズムに加えることの現実的難しさを実感した。

４．エコツーリズムで環境が救えるのか。自然保護とツーリズムは共存できるのか。

エコツーリズムに関する理想と現実との間には明らかに格差がある。環境保全が、単なる観光産業の成長、そしてオーストラリアの経済成長のための道具として使われないためには、様々な注意が必要である。そのひとつは、エコツーリズムに関する、規制や法律の整備を整えることである。自然を舞台にする観光形態では、たとえ、その名称はどうであれ、結局は、人が足を踏み入れるところはどこも環境破壊となってしまう。エコツーリズムの本来の目的は、人が環境に与えるインパクトについての洞察を深め、同時に生態系に対する感謝の気持ちを抱き、守っていくことである。従来のツーリズムが環境に与えてきた悪影響を減らし、地域住民や地域の自然が育んできた文化を高めることにもある。

しかし、現実には、エコツーリズムという名の下に、自然の樹木を切り倒して宿泊施設をつくる。水洗トイレやシャワーなど、西洋式生活スタイルには多量の水が必要であり、汚染も伴う。また、どんなに環境に配慮した行動をしていても、観光客の訪問自体が環境に物理的なインパクトを与える。たとえ歩くだけでも、動植物の生態系を含む自然を破壊してしまう。エコツーリズムの場合には、人がまだ足を踏み入れていない、手付かずの自然が舞台となる割合が多いので、結局は、観光破壊に拍車をかけてしまう。[7] 更なる問題は、通常、エコツーリズムは少人数で行われるが、規模が大きくなれば、より多くのインフラやアメニティが必要となる。フレーザー島での観光ルートは、基本的には、かつての木材の運搬道を使っている。森林伐採の島として経済的に注目されていたころの名残で、島には縦横に舗装されていない狭い道が走っている。ここを観光ツアーの４WDがひっき

りなしに走る。そして、訪問地としてほとんどすべてのツアーに含まれている湖の周辺では、ビーチへのアクセスとしての駐車場の完備や、歩行者用のボードウォークなどの建設、水洗トイレの設置がなされている。こうした事実は、結局、従来のマスツーリズムとさほど変わらないのではないかとの指摘を受けかねない。

エコツーリズムを成功に導きたければ、ツーリストに対する、環境保全と、その社会的効果についての教育が必要である。しかも、教育的ではなく教育することの創意工夫がいる。一方的な押し付けには人は反発するからである。ツーリストに、環境保全について、自然に「気づかせる」というテクニックが大切である。ここで力量を発揮するのがガイドであろう。

環境保全とツーリズムとは共存できるのかという自問に対しては、今回のケイススタディだけでは、yesと答えるには、多くの疑問が残るところである。環境への貢献度を高める運営と、快適さと便利さを求める「観光」そのものとの間には、矛盾が常に生じるからである。その矛盾をひとつずつ埋め合わせるためには、創意工夫が必要だが、kingfisher Bay & resortの取り組みは、エコツーリズムの今後の指針となるべきものである。ビジネスとして成り立たせるという現実問題に、どのように立ち向かうのかが、今後の重要課題になるであろう。世界に冠たるエコリゾートとして、マーケティング活動を強化して、経営上の困難を乗り切り、更なるエコツーリズムの発信源としての役割を果たしてくれるものとして期待する。

エコツーリズムが生き延びる唯一の道は、他のツアーとの差異化をはかることでしかない。美しい自然景観として人を楽しませるだけではなく、環境保全に役立つ情報の発信をすることがエコツーリズムである。自然と観光の共存という難しいテーマに取り組んでいるのがエコツーリズムである自覚に、参加者全員が立つことにより、この困難な課題に取り組むことができると考える。ツアーオペレーターの更なる工夫と、ツーリストの環境に関する心構えの変革が合体したときに初めて、理想のエコツーリズムに近づくことができるのであろう。

５．おわりに

人間社会はこれまでにも、産業化、都市化、そして、持続可能ではない農業活動により、自然環境の破壊を招いてきた。 観光産業もまた、環境破壊を助長してきた。ツーリストと必要物資の運搬のための、森林破壊や生態系の破壊、排気ガスによる空気汚染、汚物処理や残飯処理による水質汚染、人や車の通る道の建設などである。こうした観光形態に警鐘をならす意味で登場したのがエコツーリズムであった。一方、人にはあくことのない自然への好奇心と、畏怖と憧憬がある。まだ足を踏み入れたことのない自然の中に入りたいという欲望もある。この矛盾を解決するためには、まず、「人は環境破壊している」という自覚を持つことである。ここにエコツーリズムの出発点はあると考える。

エコツーリズムの目的は、観光を通じて、人が環境に及ぼす影響について考え、自然生態系への認識を深めることにある。また、従来の観光が及ぼしてきた悪影響を減らすことにもある。また、観光地となる地域の住民（多くは先住民）の文化を尊重し共有することも、その特徴にあげられている。そのためには、第一に、環境に配慮したツーリズム商品の開発や、エコツーリズム施設が必要となる。エネルギーや廃棄物を最小限に抑え、リサイクル、水資源の節約、そして、地域社会への経済的還元をするものである。本稿でケーススタディしたKingfisher Bay Resortで行われている、リサイクル、ミミズ農法、空調設備などは、賞賛に値するものであり、エコリゾートを目指すツアーオペレイターの見本となるべきものである。

第二に、エコ教育の発信をしていかなくてはならない。エコツアーとして認定されている以上は、エコツーリズムの基本方針である、教育的要素を持つことが不可欠である。美しい自然に触れて心が洗われることで、自然への憧憬が深まり、環境を守りたいと、観光客に思わせる

工夫である。そのためには、ツアー参加者（観光客・消費者）に、なんらかの方法で、彼らもエコ活動に参加していることの自覚をうながしていかなければいけない。

今回のケーススタディを通して、まず、ガイド自身に生態系や環境に関する、十分な興味と知識が必要であることを再認識した。各ガイドによってガイド歴や知識にも差があるので、均一にしなければならない。ガイドは、エコツーリズムの発信者としての自覚とプライドを持ち、ツアーを導かなくてはならない。ガイドに対する継続的な教育の充実と、教育者としてのガイドの自覚が、エコツアーのひとつの重要な鍵となるであろう。さもなければ、エコツーリズムという名の下に、自然は単なる観光商品になりさがってしまう。エコツーリズムでは、自然は、我々人間に教育を与えてくれる教材となるべきものである。そして、そこに重要な橋渡しとなるのがガイドということになる。

第三としては、エコツーリズムは、消費者中心の活動であることを再認識することである。エコツーリズムを運営する側が、いくら環境に配慮した施設や情報を提供しても、受け取り手の自覚がなければ、無に帰してしまう可能性がある。エコツーリズムという言葉をすべて、ツアーオペレイターの責任にしてはいけない。エコツアーに参加する消費者側も、その特色とともに、他のツアーとの相違をよく認識して参加しなければならない。加えて、ツアー商品を売る旅行代理店もまた、その商品（ツアー）を購入する消費者もともに、エコツーリズムに参与しているという自覚が必要である。旅行代理店も、ただ単に商品を売るのではなく、エコツアーについての情報も合わせて説明しなければならない。

最終的には、観光業にたずさわる者全員が、環境保全が、大局的には、更なる経済成長につながるという認識をもつことが大切である。「自分のため」「自然環境のため」「参加するみんなのため」そして、それは結果として「地球の未来のため」につながっていくという認識に基づいて、エコツーリズムを推進していかなくてはならない。今回、フレーザーという世界遺産の島で繰り広げられるエコツーリズムに参加して、著者自身、自然環境がいかにもろく、人の手で破壊されていくのかを実感すると同時に、観光と環境保全の共存という、最も難しいテーマに取り組んでいるのが、エコツーリズムだということを改めて認識させられた。

注記

(1) 愛知学泉大学・短期大学研究論集　第43号（2008）および同研究論集　第44号（2009）。
第43号では、TJapukai Aboriginal Cultural Park（ジャプカイ・アボリジナル文化パーク）を取り上げ、アボリジニ観光の成功の秘訣を考察した。第44号では、アボリジニ観光の基盤となるアボリジニ文化に焦点を当て、アボリジニ観光産業の問題点と今後の可能性について考察した。ケーススタディは、北クイーンズランド州北部で展開されるアボリジニ観光ビジネスである。

(2) Beeton（小林英俊訳2002：18）による、エコツーリズムの特色についての詳細については以下のとおりである。

①自然に基づいた（自然環境のもとで行われる）活動である。地域の自然や田舎の環境が対象であり、国立公園、世界遺産区域、保護地区、めずらしい自然現象、野生生物、景観となる。
不適切な農業、鉱業、伐採、自然災害により荒廃した土地でも、修復されつつあれば、「自然のアトラクション」になるし、土地管理プログラムの一部になっていれば、対象となる。

②教育的・解説的な要素を含んだ活動である。
情報や学ぶ機会が含まれている。例えば、自然環境や先住民の歴史や文化など。

③環境や社会面、経済的にも持続可能でなければならない。自然環境を破壊しない。そのためには管理が必要。訪問者の人数や行為が環境に及ぼす物理的インパクトの管理。廃棄物の削減や省エネの技術。
地域社会に恩恵をもたらすこと。地域住民が文化的にも財政的にもより良く生きられるように支える。地元での品物やサービスの購入。地元でスタッフを雇用。地元の観光協会、商工会議所、土地管理委員会に資金や人的サービスを提供する。

(3) ツーリズム商品とは、人が自分のニーズを満たすために、興味を持ち、購入し、利用し、消費するものである。実際のものであったり、サービスや場所、人や組織、アイディアなど様々な形態をとる。(Beeton 小林英俊訳2002：14)

(4) 詳細はwww.ecotourism.org.au参照。
オーストラリア・エコツーリズム協会による、エコツーリズムの認証システムでは、エコ認定の3つのレベルは以下のロゴによって表される。

ネイチャー・ツーリズム：自然を舞台にしたツーリズムで、環境に最小限のインパクトを与えるツーリズム。

エコツーリズム：自然を舞台にしたツーリズムで、自然資源を賢く使い、環境保全に貢献するとともに地域住民に役立つことを知るオペレーターと共に、環境について興味深く学ぶ。

上級エコツーリズム：
オーストラリアのリーダー的で最も革新的なエコツーリズム商品である。資源の有用な活用方法ばかりでなく、環境保全と地域のコミュニティの援助にも熟知し、実践力のあるオペレーターと共に、環境について学ぶ機会を提供する。

(5) キングフィッシャーベイ・リゾートが取り入れた、エコツーリズム開発理念に沿ったデザインと運営上のガイドラインは以下のとおりである。

・敷地内にある主要な樹木すべてを調査し、確認したうえでマークを付け、道路や建物が樹木を避けること。
・樹木より高い建物は建設せず、外壁にはブッシュ(林)と同じ自然の色を使う。
・95%以上の物品とサービスを地元から調達する。
・造園工事には、敷地内や周辺の植物種を使う。
・建設サイトから取り除かれるすべての植物の根を囲い造園緑化に再活用する。
・島に病原菌を持ち込まないため、埋め立て用の土砂や砂利の持込を制限する。
・道路や屋根から流れ出る水をいったん湖に排出し、水流による侵食を防ぐ。
・建設業者が樹木を切ったり傷つけないように規則を設け、監視する。

(Beeton 小林英俊訳2002：170- 2)
その他にも、当施設の関しては、小林寛子（2002）が詳しい。

(6) Eagles, Mc.Cool, Haynes(小林英俊他訳2002:321)

(7) 島川（2002：41- 9）は、エコツーリズム反対論について述べている。安易なエコツーリズムは環境破壊につながるものである。エコツーリズムは、環境や地球にやさしい観光形態ではないし、環境問題への関心を深める環境形態でもない。

参考文献

・愛知和男・盛山正仁　編著、『エコツーリズム推進法の解説』、ぎょうせい、2008年。
・小林寛子、『エコツーリズムってなに？』、河出書房新社、2002年。
・島川　崇、『観光につける薬』、同友館、2002年。
・Beeton, S, 1998, *Eco Tourism: A Practical Guide for Rural Communities*, 小林英俊訳、『エコツーリズム教本』、平凡社、2002年。
・Eagles, Mc.Cool, Haynes, 1991, *Sustainable Tourism in Protected Area'*, 小林英俊他訳、『自然保護とサステイナブル・ツーリズム』、平凡社、2002年。
・www.ecotourism.org
・www.ecotourism.org.au
・www.tourism.australia.com
・www.wttc.org